

CLOSE-UP
INTERVIEW

青柳美扇

さんに聞く

「聞き手」脇浜紀子さん 京都産業大学 現代社会学部教授

書道家、アーティストの書道パフォーマンス甲子園アンバサダー

書道パフォーマンスから
VR空間での作品制作まで
文字から広がる多彩な世界

あおやぎ・びせん

1990年生まれ、大阪府出身。梅花女子大学日本文化創造学科書道コース卒業後、同大学大学院修士課程修了。フランス、アメリカ、中国をはじめ、世界10カ国以上で書道パフォーマンスを披露。国内では、サッカー天皇杯決勝で、約6万人の観客を前にオープニングアクトを務める。ゲーム「モンスターハンターライズ」の筆文字ロゴや、手塚治虫原作のアニメ「どろろ」の題字・墨絵を担当。「伝統×革新」をテーマに新しい書道の魅力を伝えている。

大学でお習字と書道の違いを知る

脇浜 本日は書道家の青柳美扇さんにお話を伺います。

青柳さんは梅花女子大学日本文化創造学科書道コースで書道を学び、書道部長として書道パフォーマンスにも取り組まれました。その後、同大学の大学院を修了し、現在はさまざまな分野で筆文字ロゴや題字を担当するほか、書の立体アートやVRアートなど新しい分野にも挑戦されています。まずは青柳さんがどのようにして書の道に進まれたのか教えていただけますでしょうか。

青柳 私は4歳からお習字を始めたのですが、それには祖母の存在が大きかったですね。祖母は和裁の先生をしていたこともあり、日本の文化に精通していました。私はおばあちゃんっ子だったので、いつも祖母の部屋にいて、お花やお茶、お着物などを楽しみながら育ったんです。その中で一番しっくりきたのがお習字でした。字をたくさん書いて、その度に祖母が「上手だね。すごいね」と褒めてくれる。それがすごくうれしくて、お習字が大好きになりました。

脇浜 それが現在につながっているとは。やはり褒めるって大切なことなんですね。大学で書道を学ぶのは自然な流

れだったのでしょうか。

青柳 お習字はずっと続けていて、大好きなことではあったのですが、その道に進んでいいものかどうか、就職するか、大学に行くかで悩んだ時期があったんです。そんな時、高校の先生から「君は書道の才能を伸ばした方がいい。書道をしっかり学べる大学があるから頑張ってみてはどうか」とアドバイスをいただきました。その時は大学で書道を学ぶことなんて全く考えていなかったのですが、その先生の言葉がずっと胸に落ちて、梅花女子大学に進学することに決めました。

脇浜 実際に書道コースで学ばれてみていかがでしたか。

青柳 4歳から14年間、お習字を続けていて、賞もたくさんいただいていたので、正直、自分はとても上手なんだと思って天狗になっていたんです。しかし、大学の初めての授業で自信満々に先生に作品を見せたら、生まれて初めて下手だと言われて、悲しくて、悔しくて、もうワンワン泣きました。その後、授業を通してお習字と書道の違いを知り、それ以来、書道の魅力に取りつかれてしまいました。

脇浜 お習字と書道はどう違うのでしょうか。

青柳 いわゆるお習字や書写は、小学校の授業でやるよう

にお手本通りに綺麗に書きますが、書道は基本を押さえながらも、より芸術性が高く、自分らしさを出していく。そういう点で全く別物だということを知り、衝撃を受けました。

脇浜 なるほど。では、大学ではどのようにして書道を学ばれたのでしょうか。

青柳 印象に残っているのは、書論研究という授業です。この書はこの筆跡からこういう歴史があることが分かるといったことを学ぶのですが、実技だけでなく、書に関する知識を幅広く学べたことが大きな糧になっています。

書道部を盛り上げるべく始めた書道パフォーマンス

脇浜 書道部にも所属されていたそうですが、どのような活動をされていたのでしょうか。

青柳 当時の書道部は部員がとても少なかったので、顧問の先生から書道部を盛り上げて立て直してほしいと言われてきました。まずは書道部のイメージを変えるために、人に見てもらえるような華やかな活動をしようと考え、書道パフォーマンスを始めました。書道パフォーマンスが有名になったのは、愛媛県の四国中央市にある高校の書道部が、地元

の街を盛り上げるために始めたのがきっかけで、音楽に合わせて演技も交えながら書を書くパフォーマンスです。『書道ガールズ!!わたしたちの甲子園』という映画にもなり脚光を浴びました。私もそれに触発されて挑戦してみたところ、入部を希望する人が増えてきて、最終的に25名の大所帯になりました。今年、映画のモデルになった大会でもある「書道パフォーマンス甲子園」のアンバサダーに就任させていただいたのですが、とても光栄に思っています。

脇浜 普段されている書道と書道パフォーマンスはどのように違うのでしょうか。

青柳 書作をする時は、一つの作品を仕上げるのに100枚、200枚、多い時には500枚も書いて、その中で一番出来のいいものを選んで作品にします。しかし、書道パフォーマンスのようにライブで書き上げる時は、1枚しか書けません。歌手のライブに似ているかもしれませんがね。歌手は何度も録音し直して最高の状態の音源をCDにしますが、ライブではその場でしか出せない空気感やメッセージ



青柳 美扇さん

性が含まれます。だからこそ、ライブを見たいというファンがいる。書道パフォーマンスでも同様のことをやっているイメージです。ただ、決められた時間の中で作品を書き上げなければならぬので、緻密な練習が必要です。

脇浜 書道パフォーマンスで書き上げた作品を拝見しても、構図や色使いが素晴らしいと感じるのですが、どのような手順でパフォーマンスを作り上げていくのでしょうか。

青柳 最初にどんな文字を書くか、言葉選びをするところから始めます。この言葉を書きたいと思っても、実際に書いてみると字面が良くなかったりすることもあります。私が書きたい言葉で、文字の意味が良くても、書いた時のイメージがあまり良くない場合もある。言葉の選定は、作品を制作する上でとても大切です。それから構図を考えて、色使いを決めるという流れですね。

脇浜 やり直しがきかないという怖さはないですか。

青柳 書道パフォーマンス自体は通常5分程度のものなのですが、実はそれまでの準備期間がとても長いんです。文字の練習はもちろんですが魅せ場をつくりながら時間通りに書き上げる練習を続けます。本番の前に天候や気温に合わせて墨の調合をしたり、万全の準備をしていますから、失敗

するかもしれないという不安はありません。パフォーマンスを始めた当初は緊張しましたが、場数を踏んだことで、緊張というより気が引き締まる感覚になりました。

脇浜 2020年には「天皇杯

JFA 全日本サッカー選手権大会」のオープニングアクトとして書道パフォーマンスをされました。6万人もの観衆の目の前で書かれるわけですが、そんな大舞台でも緊張されないのですか。

青柳 たくさんの人の前で書を書くという貴重な機会をいただき、高揚感でいっぱいでした。最高の字を皆さんに届けて、サポーターの方々、選手やチームの方々と一緒に大会を盛り上げたいという思いで書きました。書き終わると同時に、観客席から地鳴りのような声援が聞こえてきて、選手の皆さんはこうしてパワーをもらっているんだと実感できました。

脇浜 海外でも書道パフォーマンスをされていますが、反応は違うものですか。

青柳 海外では漢字自体の意味は伝わらないことがほとん



どなので、アートやエンターテインメントとして楽しんでいただく方が多いですね。そのため、甲冑かちゅうを身に着けて書を書いたりすることもあります。それだけに、スタンディングオベーションという形で大きな反応をいただいて、続けてきて良かったと改めて思いました。また、書道のワークショップも併せて開催することがあるのですが、海外の方にもとても楽しんでくれます。書き順などにとらわれず、自由に書かれるので、こんな風に文字を捉えるんだという新たな発見もあり、大きな刺激を受けています。

脇浜 甲冑を身に着けてパフォーマンスをされるということですが、伝統的な書道の世界では厳しいお言葉もあつたのではないかと推察します。

青柳 そうですね。床に寝かせた紙に筆を立てて、自然な流れで書くというのが本来の書道ですが、パフォーマンスでは立て掛けた紙に筆先が垂れるような形で書くのですから、それは書道ではないと言われることはありません。

脇浜 そうした声に対して、どのように対処されたのでしょうか。

青柳 私は書道パフォーマンスを大学からずっと続けてきましたし、自分のルーツにもなっています。これからも書道

パフォーマンスの魅力を伝えていきたいし、大切な活動として今後も続けていきたいと思っています。信念を持ってやっていますから、お言葉は真摯に受け止めるものの、何も変えることはなかったです。ただ、日々お稽古に励み、しっかりと実力も磨かなくてはならないと考えるようになりました。

何百枚も書いてたどり着く最高の一枚

脇浜 書道パフォーマンスだけでなく、さまざまな筆文字ロゴや題字なども手掛けられています。制作するに当たり、インスピレーションはどこから湧いてくるのでしょうか。例えば、『アニメ『どろろ』の題字もとても印象的ですが、制作過程を教えてください。

青柳 映像作品の題字のお話をいただいた時は、監督とお話をさせていただいて、作品にかける思いや題字のイメージをヒアリングしたりすることもあります。それを私なりに解釈して表現に落とし込んでいく感じですね。

脇浜 それから何枚も何枚も書かれるわけですか。

青柳 何百枚も書くこともあります。でも、よくあることなのですが、1枚目を書いた時のほうが、邪心が入らず、頭も柔軟なので、良いものができることがあるんです。実際、

『どろろ』の題字もものすごい枚数を書いたのですが、選んだのは1枚目でした。

脇浜 やはり1枚目が良いという結論にたどり着くまでには、何百枚も書く作業が必要だったということですね。

青柳 1枚目を超えるために、2枚、3枚、10枚、100枚と書いていきます。しかし、書き続けているとだんだん頭も固まってきてしまふんです。こんな構図で、ここはこう表現して、とテクニカルな部分に気を取られてしまい、思いが入っていかなくなってしまうこともある。正解がないものなので、どこまで書き続けるかが難しいところです。

脇浜 良し悪しを自分で判断する眼も必要なのでしょうね。

青柳 そこは母の存在も大きいですね。第三者の目線からの客観的な意見はもちろんですが、一番近くで作品を見てくれているので、毎回貴重な意見をもらっています。

脇浜 オフタイムについても伺ってみたいと思います。サーフィンをなさると伺いましたが、オフはアウトドア派のですか。

青柳 小さい頃からお習字を続けてきましたが、自然が豊かなところで育ったせいやお稽古以外では自然や動物と触れ合う日々でした。今はその延長かもしれませんが。普段はこのアトリエですと作品創作しているので、たまのオ

フの日には外に出て太陽を浴び、光合成して回復する感覚です。自然の中に行くとパワーをすぐくもらえるので、作品創作であれを書いてみようとか、インスピレーションを得たり。自然に触れてリセットすることで大らかな気持ちで帰ってきて、また作品に挑む、という感じですね。

VR空間に表現の場を広げる

脇浜 最近、バーチャルリアリティ（VR）の世界にも表現の場を広げているようですが、どういう経緯で、筆と墨のアナログな世界からデジタルの世界に進出されたのでしょうか。

青柳 昨年、「美」という文字の形に打ち抜いた金属のプレートを5000枚貼り合わせて鳳凰を作るなど、1年かけて立体作品の制作に挑戦したのですが、物理的にとても大変な作業でした。プレートを一枚一枚貼り付けて制作するのですが、その制作作業で培った技術と経験を他で生かせないかと考えていた時に、以前から興味があったVRが使えるのアーティストの方にSNSでコンタクトを取って見たところ、一度、VRチャットでお会いしましょうと言われました。全く未経験のことでしたが、すぐに専用のゴーグルを買って、自分

のアバターを作って、初めてVR空間に入ってみました。

脇浜 未来を感じさせるお話ですね。

青柳 VR空間の中でアーティストの方にお会いした際、この空間に自分の書道のワールドを作って世界中の人に会いに来て欲しいという話をしたら、「できますよ」と言われて。それから、VR空間に作られたさまざまなワールドに連れて行ってもらいました。本当に衝撃的な1日でした。VRの技術者の方をご紹介いただき、いろいろな技術について学び、VR空間で「美」の文字を組み合わせて鳳凰や風神雷神を作ったり、立体的な文字を書いたりすることができるようになりました。11月に開催する個展では、LEDビジョンを設置して、私が作ったVRワールドを皆さんに体験していただく予定です。

脇浜 先進的な取り組みをされていますが、そのモチベーションの源は何なのでしょう。

青柳 書道が大好きなんです。書道を通して何か新しいことをしたいという気持ちは常にあります。経験したことがないことに挑戦するのはとてもワクワクしますしね。これからも伝統と革新を意識しながら、Web3.0時代のアーティストとして活躍していきたいと考えています。

そうした活動を通して、若い人や子どもたちに書道に興味を持ってもらえるとうれしいですね。

素晴らしい日本文化である

書道の認知度をもっと高めたい

脇浜 子どもたちに書道の楽しさを伝えたいという思いが根本にあるんですね。

青柳 私自身、子どもの頃に「書道って楽しい」と思えたから、今までもずっと続けることができました。今の子どもたちにもそういう楽しいと思えるものがあれば、明るい未来が描けるのではないかと思います。また、書道は日本の素晴らしい文化の一つですから、さまざまな形で広がっていくことで日本の未来も明るくなるのではないかと思います。美術館で開催される国宝展などを見に行っても、絵や陶芸作品などの前は人だかりができていて、書道作品の周りにはあまり人がいないんです。ずっと見入ってしまうような素晴らしい作品があるのに、あまり注目されないことがちょっと悔しい。やはり書道の認知度をもっと高めたいと思いますね。

脇浜 私は今でも字を書くのが苦手なのですが、そんな人に向けて何かアドバイスはありますか。

青柳 まず、大切な自分の名前をきれいに書けるようになることが、文字を書くことを好きになる良いきっかけになると思います。書いてみると、完璧でなくても、「ここは好きだな」と思える部分があるはず。全部の文字が上手く書けなくても、この一字は上手く書けたというように自分なりに良いと思える部分をたくさん見つけていくといいのではないのでしょうか。それを少しずつ増やしていくことが上達につながると思います。

脇浜 青柳さんは常にかばんにはがきを入れているそうですね。

青柳 VRの世界にワクワクしたり、SNSでいろんな人と交流したりもしていますが、実は結構アナログなんです。切手を貼ったはがきをいつも持ち歩いていて、お会いした方にすぐお礼状を書いたりしています。

脇浜 きれいな字が書かれたはがきが届いたら相手の方もうれしいでしょうね。

青柳 やはり手書きの魅力というものがありますからね。活字できれいにプリントされた手紙より、子どもが一生懸命書いた手紙の方がうれしいものです。書いた人の心が手書きの文字にはこもりますから。

脇浜 最後の質問となりますが、今後、書道を通してどのような夢を実現していきたいとお考えですか。

青柳 直近でかなえたい私の夢は、2025年の大阪・関西万博に書道家として携わることです。世界から注目されるイベントの演出に書道が組み込まれれば、書道にもっと注目が集まるでしょうから。私も書道家としてできることを発信していきたいと思っています。その先の夢は、世界で一番愛される文字を書く書道家になることです。書道と言えば青柳美扇だと、世界でも認知されるレベルの活動をしていきたいと思っています。影響力を持つことができれば、例えば、書道を通じたチャリティ活動をするなど、もっと社会に貢献することができるとは考えています。

脇浜 そのために、すごい熱量を持って書道に取り組まれていることが伝わってきました。これからも青柳さんの活動から目が離せません。本日はどうもありがとうございました。

